

【教員寄稿】

初期ブラジル移民の開拓の姿を描く
—沼田信一著『信ちゃんの昔話』—

堀坂浩太郎

日本からブラジルへの計画移住が始まったのは1908年であり、すでに1世紀余りが経過している。テレビもない時代、地球を半周して新天地に足を着けたときの思い、耕地を切り開くために鬱蒼としたジャングルに立ち向かったときの気概、赤土に足を取られ毒蛇の恐怖におののいた時の気持ちは、丹精込めたコーヒーが霜害にやられた時の落胆、母国・日本が第二次世界大戦に突入し敗戦に及んだ時の複雑な心境は、そしてやっと生活が落ち着きブラジルに定着した安堵感はどんなものであったのであろうか。

こうした移民の生の声を伝えてくれるのが、ここに紹介する『信ちゃんの昔話』全10巻である（出版はサンパウロのトッパンプレス）。1巻ごとに30話程度、生活実感そのままを書き進み、1冊終わるとまたもう1冊と筆をとり、6年かけて10巻の出版を終えた。それぞれの巻（部）のタイトル一覧をみただけでも、生活の光景が浮かび上がり、ブラジル耕地の匂いが漂ってくる。

- | | |
|------------------|------------|
| 第1部 カフェーと移民 | (発行：1996年) |
| 第2部 ピンガと移民 | (1996年) |
| 第3部 毒蛇と移民 | (1997年) |
| 第4部 ムダンサ（引越し）と移民 | (1997年) |
| 第5部 赤土と移民 | (1998年) |
| 第6部 ビッショ（砂ノミ）と移民 | (1999年) |
| 第7部 霜（ジェアーダ）と移民 | (1999年) |
| 第8部 戦争と移民 | (2001年) |
| 第9部 風土病と移民 | (2001年) |
| 第10部 ジャングルと移民 | (2002年) |

著者の沼田信一氏は、世界大恐慌（1929年）から4年後の1933年にブラジルの土を踏んでいる。当時、高等小学校卒の15歳。札幌出身の父母

に連れられサンパウロ州南部のセッテ・バーラス植民地に入植した。男の働き手は父親と長兄、それに信一の3人であった。植民会社から購入したジャングルを切り開き稲作を試みたものの条件の悪さに断念し、翌34年には、パラナ州ロンドリーナに転地した。

ロンドリーナは日系人が集住する同州第2の都市だが、当時はまだ原野そのまま。そこを拠点に開拓に挑み、一貫してコーヒー、大豆、小麦、サトウキビ等の農業に従事し、日系社会の指導者的な存在となった。78歳の時に本書第1部を刊行し、第10部の発刊は83歳の時である。

その第10部の冒頭は次の一節で始まる。

(注：渡伯前、父母は菓子屋)

移住すりゃ菓子屋の主人もやま (ジャングル) 拓く
移住すりゃ学校の先生もやま (ジャングル) 拓く
移住すりゃ巡査 (おまわり) さんもやま (ジャングル) 拓く
移住すりゃ質屋の旦那もやま (ジャングル) 拓く
移住すりゃソバ屋の主人もやま (ジャングル) 拓く
移住すりゃ呉服屋さんもやま (ジャングル) 拓く
ブラジルはバンデイランテ (開拓者) が良く育つ

さらに続けて「顧みて誠に不思議に思われる事は、ブラジルへ来た移民は、サンパウロ州でも、パラナ州でも、その殆んどが、人跡未踏の、昼尚暗き密林で有ったにもかかわらず・・・この大密林の開拓に向かった事である。・・・それも開拓の無経験者が大方であるから驚きである。・・・開拓の一つは地主への最短距離でもあったのである」と語る。

著者の試算によるが、「僅か20万人足らずの移民が、本国(日本)の8%にも届くかと思われる程の広大な面積のジャングルを、道具の無いまま、大なた(ホイセ)と、まさかり(マッシュャード)と言う腕の力だけで切り拓いて来たのである・・・。」

本書は、ブラジル移住の一番苦境な時代を淡々と綴る尊い記録であり、地元一世の間で好評であったが、日本ではその存在は殆んど知られていなかった。幸い、来日した日系人の友人が「伯父の手による執筆」として寄贈してくれたので、本学のイベロアメリカ研究所にて閲覧可能となった。